

平和祈願ミサ・説教 勝谷太治 司教 2017/8/15

先日インドネシアでアジアニュースディが行われました。…。

ミンダナオも然りです。…。

報道による偏見が植え付けられている良い例ですが、日本はどうでしょうか。

個人的な意見ですが、最近の北朝鮮危機についての報道はかなり偏っていると感じます。今の北朝鮮の危機を極端に煽り、もはや対話は不可能、対話のための対話は無意味、経済的圧力とアメリカとの同盟を重視した軍事力による抑止しか方法はない、という世論が形成されようとしています。中国の平和的解決を求める主張や韓国大統領の対話を呼び掛ける必死の主張はほとんど報道されないか、ニュースの最後の15秒くらいの扱いで、注目するまでもないものであるかのような報道です。

今、平和的解決、対話による解決をとというようなことをネットで発信すれば、すかさず激しくバッシングされます。ものを言うのとたたかれる。それ故に発言を自粛するという形で、不本意な世論が形成される危うさがあります。

ニュルンベルク裁判でナチスの幹部で会ったヘルマン・ゲーリンクは次のように証言しています。

「もちろん、一般市民は戦争を望んでいない。貧しい農民にとって、戦争から得られる最善の結果といえば、自分の農場に五体満足で戻ることなのだから、わざわざ自分の命を危険に晒したいと考えるはずがない。当然、普通の市民は戦争が嫌いだ。ロシア人だろうと、イギリス人だろうと、アメリカ人だろうと、その点についてはドイツ人だろうと同じだ。それはわかっている。しかし、結局、政策を決定するのは国の指導者達であり、国民をそれに巻き込むのは、民主主義だろうと、ファシスト的独裁制だろうと、議会制だろうと共産主義的独裁制だろうと、常に簡単なことだ。」——民主主義体制では国民は代表を通じて意見出来るしアメリカでは議会だけが宣戦する権利がある 「それはそれで結構だが、意見を言おうと言うまいと、国民は常に指導者たちの意のままになるものだ。簡単なことだ。自分達が外国から攻撃されていると説明するだけでいい。そして、平和主義者については、彼らは愛国心がなく国家を危険に晒す人々だと公然と非難すればいいだけのことだ。この方法はどの国でも同じように通用するものだ。」

今の日本は大丈夫でしょうか。

今、世界中のカトリック系平和グループは一丸となって、「Non Violence」「非暴力」のキャンペーンを行っています。これは、「戦争」すなわち「武力行使」そのものをたとえそれが防衛のためであっても、「違法」とすることを目的としています。最近「核兵器の使用」が違法であるという決議が国連で採択されました。残念ながら日本は反対に回り、批准はおろか、その話し合いの席に着くことも拒否しました。

核兵器の使用禁止ですら難しいのに、戦争を非合法とするのは現実的とは言えないかもしれません。しかし、一昔前には核兵器の非合法化などは非現実的と考えられていました。未だ不完全ではありますが、核保有国以外の世界の国々はこれを支持しているのです。「戦争」の非合法化も単なる非現実的な理想ではなく、必ず実現する日が来ると信じて活動し

ているのです。

現代世界憲章 81

81 軍拡競争

神の摂理は我々が常に戦争に訴えるという古来の悪習を断ち切ることを切に求めている。

核兵器等の大量破壊兵器について

80 全面戦争

科学兵器の進歩により、戦争のおぞましさと邪悪さは無限に増大する。実際、これらの兵器を使用する戦闘行為は、… 神と人間自身に対する犯罪であり、ためらうことなく断固として断罪されなければならない。

82 戦争絶対禁止と戦争回避のための国際行動

いかなる戦争も絶対に禁止するため、すべての国によって承認された公権の設置が必要である。

平和は、兵器の恐怖によって諸国に押し付けられるものではなく、諸民族の相互信頼から生まれるべきものである。

統治者は大衆の世論と意識に依存している。敵意、軽蔑、不信、憎悪、頑固なイデオロギーによって人々が分裂し、対立している間は、平和を求める努力は役に立たない。

➡ 教育の必要

この非暴力の考えは、フランシスコ教皇によって今年の「世界平和の日」メッセージの中で、「積極的創造的非暴力」として、語られています。教皇様はこれこそが教会の目指すものであることをわかりやすく説明しています。是非、皆さんもこれを読み、話し合っていたきたいと願います。

私たちは単純に福音の理念、抽象的観念的なところから反戦を叫んでいるのではありません。今の世間の論争はまるでゲーム感覚で語られている危惧を感じてやみません。アメリカと北朝鮮の二人の指導者は、実際に戦争の火ぶたを切る気がないにもかかわらず、子供のけんかのように威嚇し合っています。しかし、それでいて実際に戦争の準備がなされていることも確かです。本人たちにその気がなくても戦争は偶発的に起こるのです。もし舌戦がピークに達したところで、38度線の非武装地帯で小さな衝突でも起こったならば、一気に戦争に発展する恐れもあります。第一次世界大戦はそのようにして起こったのです。

私たち信仰者は紛争のどちらに正当性があるかという観念的議論をしているのではありません。小さくされている人々の痛みに関心する福音の「心」にその根拠を置くのです。

ずいぶん前になりますが、報道ステーションで古館さんがまだキャスターをしていた頃、彼の発言「空爆による誤爆もテロ」という趣旨の発言が激しくバッシングされました。テロと軍関係施設を狙った「正当な戦闘行為」とは全く違うもので、一般市民を殺害するテロと空爆による誤爆を同一視するのは全くの見当違いだというものでした。

私もそのニュースを見ていましたが、テロや空爆の戦闘行為の正当性についての観念的な議論ではなく、犠牲者の痛みに関心する立場から、彼らにとってある日突然理不尽に命を

奪われると言うことは、テロも空爆も同じことで、その上でこのような現実が正しいわけがなく、武力による解決以外の方法を模索するようにとの提案だったと理解していました。

日本人は先の大戦から、戦争のもたらす一般市民への甚大な被害を体験しました。それは、日本のみならずアジア諸国へ与えた被害も含め、一般市民に対する無差別な攻撃による殺戮の体験でした。特に、原爆による被害は言語を絶するものでした。しかし、それが正当な戦闘行為か、一般市民への犯罪的無差別大量虐殺であったかという議論はあまり表立ってなされていません。その議論よりも、むしろ、被害の悲惨さと苦しみを全国民が共有したところから、その原因となった戦争自体を二度と起こしてはならないと強く決心し、不戦の理念を掲げた憲法を心から受け入れ支持し続けてきたのです。

そして、世代を越えて受け継がれてきたこの体験は、私たちの心の奥底に恒久平和の希求と不戦の誓いとして刻み込まれているのです。戦後 70 年以上を経て、この悲惨な体験の実感とそれへの共感が薄れ、戦争を観念的にとらえることに懸念を感じています。

今現代世界憲章で唱われ、世界中の平和グループがその実現のために活動し、教皇様が訴えている、「戦争」そのものを否定する「積極的、創造的非暴力」の考え方は、これからの時代を導いていく理念であると確信しています。そして、日本は世界に先駆けて、そのことを国家として宣言している唯一の国であることを忘れないでほしいと思います。